

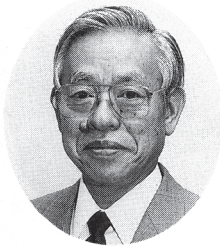
(Japanese Academy of Learning Disabilities)

## 日本LD学会会報

第24号



事務局：東京学芸大学心理学研究室内 〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1  
TEL&FAX. 0423-27-2890



## かれらに、まず安らぎを

大正大学大学院教授

野村 東 助

学習障害だといわれて親子共々にほっとしたという。そんな話をあちこちで聞くようになった。ほっとして、楽になって、肩の力が抜けてくると、だいぶ風向きが変わったというのである。

なるほど、そういうことって、大いにあるだろうなど、私は大きく頷きながらその話を聞いた。

それにしても、自分にそういうハンディキャップがあることを知らされて、ショックを受けるのではなくかえってほっとするというのは、学習障害に特有のことかと思う。自閉症や知恵遅れの場合にはあまり聞いたことがない。

それというのも、一般に学習障害というのは理解されにくいからであろう。かれらが示す学習や行動面の諸困難は、学習能力の発達の偏りなど、いわば本人の責任外の要因に起因するものであるというふうには、考えられにくいのである。かれらは実際にほかの面では、人並みにできるどころ、しっかりしているところも結構あるので、周囲も本人も、やればできる、その気になって努力しさえすればもう少しなんとかなる筈だと、つい思っ

てしまうのである。

その結果、やみくもな努力とがんばりの道をひた走ることとなる。しかしその道は、行けども行けども挫折感を積み重ねるだけで、やがては矢折れ刀つき、行き着くところは深い無力感の淵である。

学習障害であることを正しく教えられることによって、努力が空しかったのは努力が足りなかったからではなく、努力そのものが見当違いであったことを知る。「ほっとした」というのは、こうして重くのしかかっていた一種自責の念と、無駄な努力から解放されたからであろう。

ほっとして、それで事が解決するわけではもちろんない。しかし、それを契機に自分を取り戻し、ここから、今度は正しい道への足がかりをつかむことができる。

それにしても、誤解にまみれてあがいているときの学習障害児とその関係者は、どんなにかつらく、空しく、疲れていることか、その状況の厳しさを、改めて教えてもらった。